

主日礼拝

2023年6月4日（日）

題 「共に立つて」

テキスト：使徒言行録2章14～21節

皆さま、おはようございます。

先週の礼拝では神さまの霊、聖霊が弟子たちに降ってイエスにある群れ、主の教会が誕生したことを共に喜びました。礼拝後には、久しぶり集って、お祝いの集いを持てましたことを感謝しました。

今日の聖書の箇所はイエスの弟子であるペトロの説教の部分の最初のところです。共に聖書の言葉に聞きましょう。

◆ペトロの説教

14:すると、ペトロは十一人と共に立つて、声を張り上げ、話し始めた。

「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。」

イエスの姿が、地上では見えなくなった後、イエスの12人の弟子たちは、

イエスを慕っていた人々と一緒に集まって祈り、語り合っていたようです。その時、神の聖霊がくだるというペンテコステの出来事が起こったのです。この事は、愛するイエスを失って悲しみの中にいた弟子たちの新しい歩み、出発の時ともなったのです。

4節には、「すると、ペトロは十一人と共に立つて、声を張り上げ、話し始めた。」と記されています。「共に立つて、」という言葉が心に残りました。

ここで「立つて」とは、「立つ」ということ。聖書では「立つ」とか「起きる」という言葉は、復活を示すことばとして用いられることがあります。

十字架で死なれたイエスは復活されました。イエスに従って生きて来た弟子たちは、十字架で愛したイエスを失い、あたかも自分たちが死んだような体験をしたのだと思います。すべてが終わったような悲しみと絶望感の中にうずくまるような時を過ごしたのだと思います。ここにいる私たちにとっても、他人ごとではなく、愛する家族を失った時など、自分の力ではどうすることもできない、悲しみや絶望を感じ、生きていく意欲を失うこともあるのだと思います。

聖書にあるように、ペンテコステの出来事を体験して、ペトロは十一人と共に立ったのです。つまり、氣力を失い、死んでいたかのような弟子たちが、立ち上がり、つまり復活したかのように、立ち上がり、新たに歩み出したのです。

そのことをペトロの姿に学ぶことができます。ペトロは、力強く、そこにいた人々に向かって、声を張り上げ、話し始めたのです。これは伝道、宣教の姿です。神の力による働きが起こって起こったのです。

「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。」とペトロは語り出しました。そして、あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだと言って、あざける人々に、語ります。

15:今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているではありません。

16:そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。

立ち上がったペトロは、約2000年前のユダヤ人たちが知っていた旧約聖書の預言者ヨエルのことばを用いて説得して行ったのです。ヨエル書は3章だけの短い書物ですのでペンテコステの機会に読んどみることをお勧めします。いながらの異常な大発生、疫病や国の破壊などが語られる一方、主の日は、神の裁きが近づいていること、終わりの日は、単に終わりではなく、神さまの憐みと救いの完成の時でもあるのです。ですから人々に悔い改めることを勧めます。救いの日がくること、神の憐みがあることが伝えられています。

この時、ペトロは、ペンテコステは出来事はこのヨエル書の預言の実現であると、声を大にしてユダヤの人々に訴えたのです。

本来、預言するとは、未来のことを予想して語るのではなく、神からの言葉を聞いて預かって語ることという姿に表れているのです。

ちなみに旧約聖書では、「ことば」とは、神さまの思い、出来事であると理解されているのです。ことばは出来事となる。ここに語ることについての、わたしたち人間の責任も問われるのです。

ペトロが語った17節以降のことばは、ヨエル書3章1節～5節（P1425）のことばです。ここには、戦いで破壊されたイスラエルの国と民の復興への希望が語られているとも言われます。わたしたちの場合は、戦時中、戦後の日本の姿や現在のウクライナの国や人々の姿と重なるかのようです。また、ペトロや、これから生きる初代教会やキリスト者の姿をも思われます。つまり苦難を生きる国や人々への力強いメッセージでもあるのです。

17:『神は言われる。終わりの時に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。

すると、あなたたちの息子と娘は預言し、／若者は幻を見、老人は

夢を見る。

終わりの時が語られます。少し、怖い気持ちにもなります。終わりの時とは主の日ともいわれます。古い世界が荒廃し、新しい世界が実現する時、この日がいつかは人間が決めることはできません。神の時、主の日と言われます。神さまは憐み深い方です。

しかし、終わりの日、主の日には、二つの理解があります。一つは遠い将来のこととして、もう一つは、神の子イエスが地上に来たこと、ここに終わり日、主の日は始まっているとの理解です。

ですからわたしたちは、伝道者パウロが語ったように、神の慈愛と厳しさも覚えて日常の生活を送らなければならないのだと思います。神と主イエス・キリストは共にいてくださるので、どんなに取り巻く状況が悪く見えても、いたずらに不安の中を生きる必要はないのです。むしろ主イエスのことばである「恐れることはない。」との生きたことばに生かされるです。

息子と娘は預言し、／若者は幻を見、老人は夢を見る。

それぞれに与えられている神からの賜物があるのです。幻は、ビジョンといわれます。また「幻のない民は滅びる。」とも言われます。わたしたちもイエス・キリストを土台としてわくわくするビジョンを持ちたいと願います。

18:わたしの僕やはしためにも、／そのときには、わたしの霊を注ぐ。

すると、彼らは預言する。

神さまの霊は、性別や年齢に関係なく注がれるのです。また地位や境遇に制限されることはないのです。

19:上では、天に不思議な業を、／下では、地に徴を示そう。血と火と立ちこめる煙が、それだ。

その日には、天と地にしるしが表れる。

20:主の偉大な輝かしい日が来る前に、／太陽は暗くなり、／月は血のように赤くなる。

その日には宇宙規模の変化が表れる。しかし、大切なことは、忘れてはならないことは、主の偉大な輝かしい日が来るということです。

ここには、天と地を創造された神のよる、宇宙規模の再創造の働きが語られているかのように受けとめます。

神学者のモルトマンは、聖書が告げる神は、天と死の創造の神であり、造られたものを保持して行かれる神でもあり、来るべき時に再創造される神でもあるとの理解を教えてください。ここにいる私たちは、自分で祈って、歴史からも学び、一人ひとり考え思い巡らすことを許されているのだと思います。

今日の最後の聖書のことばに慰められます。

21:主の名を呼び求める者は皆、救われる。

「主」へブライ語でヤハウエーという言葉は本来、神さまを指すことばですが、ペトロは神を指す主ということばを、イエス・キリストに対して用いています。ここから初代教会においては主・イエス・キリストという信仰の告白が生まれたのです。

この告白は、初代教会の告白となり、今日まで約2000年続いているのです。

たとえ、どこにいても、どのような状態になっても、

21:主の名を呼び求める者は皆、救われる。

霊においても魂においても、更に肉体をもったようなすがたとして生き生きとよみがえるという信仰です。

ですから主イエス・キリストとの告白をできる人は、何と言う幸いな中にいることでしょうか。神さまの憐みと輝きに包まれていることを信じ共に生きていきたいと願います。

皆様の上に主の平安をお祈りいたします。共に黙想しましょう。